

卒業論文の要旨

論文題目	The Founders of the Irish Suffrage Movement and their Tactics
氏名	Rakuko Suzuki (鈴木楽子)
メジャー	英語学・英米文学
<p>2021 年度にはゼミ論文としてイギリスの女性参政権運動についてまとめた。2022 年度にはアイルランド長期留学をし、イギリスとかつてその統治下にあったアイルランドでは女性参政権運動にどのような違いがあったのかについて興味を持った。アイルランドの歴史や独立運動に関する資料や論文は多いが、女性参政権運動について書かれた文献は現地でも多くはなく、ましてや日本語文献はほとんどない。今回は実際に留学先で手に入れた英語文献を主に用いながら、アイルランドの 19 世紀から 20 世紀のアイルランドでの女性参政権運動の基礎を築き上げてきた人物達の主な活動方針とその多様性、そしてイギリス本国の女性参政権運動との違いや関連性を明らかにしていく。</p> <p>19 世紀後半には穏健派の活動家たちが活躍した。1870 年にアイルランドで初めて女性参政権についての集会を行った Anne Robertson に続き、1872 年にはアイルランドで初めて活動団体を創設した Isabelle Tod、1879 年にダブリンで活動を展開させた Anna Haslam などが挙げられる。イギリスの活動家との繋がりも強く、国内外をお互いが行き来して幅広く講演を行うなどの協定関係が見られた。</p> <p>20 世紀初頭には穏健派の活動に異議を唱え、女性への待遇を変えない社会に辟易し、目的達成のためには手段を選ばない戦闘派が現れ始める。1908 年に新しく活動団体を創った Hanna Sheehy Skeffington と Margaret Cousins は、建物の破壊や獄中で食餌を拒否するハンガーストライキのような強硬手段も厭わなかった。彼女たちはイギリスと協定関係にはあったが、独立運動が盛り上がるにつれて、アイルランドとイギリスの女性参政権運動は別のものであり、自分たちの問題は自分たちで扱うという線引きの意思が強まっていった。</p> <p>また、イギリスの女性参政権運動と比較してもその違いは顕著である。例えば、アイルランドで戦闘派といっても、イギリスでは建物への放火や人への暴力行為があった一方、アイルランドでは建物の一部破壊という行為が多かったように、暴動行為の内容はイギリスと比べれば優しいものであった。</p> <p>一口に女性参政権運動と言っても、その背景や活動家たちの軌跡を見ることで、より社会体制への疑問が浮き彫りになり、女性である自分の在り方などについての考えを深めることができると感じた。</p>	
<p>(指導教員の推薦のコメント)</p> <p>ゼミ論の執筆でイギリスの女性参政権運動史を理解した上で、アイルランド長期留学中に文献を集め、それらをしっかりと読み込んで書き上げたアイルランド女性参政権運動史である。19 世紀にイギリス領だったアイルランドが一部独立を実現するまでの時期を扱っており、イングランドの運動との協力や相違、独立運動と女性参政権運動との関係にも慎重に目を配った考察ができています。日本語文献が少ないテーマのため多くの英語文献を使用し、英文で書き上げた意欲と努力も評価したい。</p>	